

3/13/2011

イエスは誘惑された マタイ4:1-11

主イエスは洗礼者ヨハネから洗礼をお受けになった後、神の摂理の器としての自分を模索するために荒野で祈りと思案の日々をお送りになりました。しかし、そこで彼が出会ったのは神ではなく、サタンだったとマタイの福音書は記しています。

サタン、悪魔とは、この世の悪を一手にした、神の最も手強い敵を意味します。主イエスは悪魔から3回にわたって誘惑を受けられたのです。

第一回目の誘惑、それは、「もしお前が神の子ならば、これらの石をパンに変えてみろ」というものです。

聖書の中でパンとはたんなる食べ物のパンだけでなく、この世の物質的豊かさを象徴する言葉として使われています。「人間にとって大切なもの、それは金だ。物質的豊かさが人間の価値を図る尺度だ。 そうだろう。」そうサタンは主イエスに挑戦したのです。

主イエスは頭を振り、答えます。「それは違う。パンは大切だ。物質も大切だ。しかしそれらのものを人間を測る唯一の尺度とみなす時、人間は恐ろしい存在へと墮落する。パンは分かち合われてこそ、人間の生活を潤すものとなる。」「人はパンのみに拠って生きるのではない。」という主イエスの言葉の意味がここにあります。「人は神の一つ一つの言葉によって生きる」という言葉の意味がここにあります。

サタンの第二の誘惑は、主イエスを神殿のてっぺんに連れていくところから始まります。「ここから飛び降りてみる。神の天使がお前を救いに飛んでくるか試してみろ。」

神殿は祭司長や律法学者の権威の象徴でした。しかしそれらの宗教指導者達は、貧しい者、身体に障害を持つ者、精神を病んでいる者を神に呪われた者として蔑んだのです。

サタンは主イエスに、そのような宗教指導者達の姿を当然のこととして認めろと迫ったのです。汚い者を避け、貧困者の群れを回避するのは当然ではないか、と言うのです。当たり前なことにいちいち文句をつけることはないだろう、と。

主イエスは頭を横に振り続けられます。そのような態度は神の思いではない。絶対認めない。誰が何と言っても、私は良しとしない。

三回目の誘惑は権力者になってこの世を治めるという誘惑です。サタンは高い山の頂上に主イエスを連れて行き、そこに広がる国々を見せて言います。「私を拝め。そうすれば、これらの国々すべてをお前にくれてやる。」主イエスは、きっぱりと言います。「サタンよ、退け。」

ここで三つの誘惑の共通点が明らかになります。神などいないと言え。神の存在を認めるな。人間の目に見えるもの、手で触れるもの、耳で聞こえるもの、それだけが真理だ。神の愛とか、慈しみとか、罪の赦しとか難しいことを言うのは‘よせ。’これが三つの誘惑の共通点です。

主イエスは、神への信仰を捨てるように誘惑されたのです。背信を迫られたのです。誘惑にあって苦しめられたのです。

私たちもそうではないでしょうか。神など信じない方がよっぽど楽だと思う時はないでしょうか。神の沈黙の前に心がなえてしまうことはないでしょうか。

ここで確かなことは、そういう時、自分は駄目だ、信仰が浅いと自己卑下に陥ることはないのです。何故なら、主イエスもまたそのような誘惑に会い、苦しめられたからです。

主イエスはサタンの誘惑に打ち勝たれたと聖書は記します。「サタンよ、引き下がれ」私たちはここで、胸に叩き付ける必要があります。主イエスの戦いは私たちのためのものでもあるのです。主イエスは私たちのために誘惑と戦い、私たちのために誘惑を克服されたのです。

しかし、それは、私たちは誘惑と戦わなくてもいいという現状肯定ではありません。主イエスが自分のために戦ってくださったのだから、自分もまた一生懸命戦おうという勇気と希望を私たちはそこに発見することができます。

主イエスは私たちに呼びかけておられます。「起きよ、恐れるな。」この言葉を胸に刻み付けること、これが主イエスと共に生きるということです。主イエスは私たちのために戦ってくださっているのです。私たちのためにです。この信仰にいざなわれてこの暗い世界を歩むこと、これが私たちに与えられたキリストの平和です。

願わくは、キリストの平和が、この礼拝堂に集っているあなたがた一人一人の上にとこしえにあるように。今日も、明日も、とこしえに。